

## ▼書評

### 星乃治彦著 『ナチス前夜における「抵抗」の歴史』

(ミネルヴァ書房、二〇〇七年三月、二六二頁、五五〇〇円＋税)

高崎みずほ

わが国におけるナチス研究はなお活況を呈している。多様な観点から捉えられる中で、近年の研究の関心は、ナチスが大衆を惹きつけることに成功した要因へ向けられている。一方でこうした傾向に比べると、そのナチスの魅力あるいは威力を拒もうとした「抵抗」の動きに関する研究は沈滞していると言わざるを得ない。著者の表現を借りれば、それはある種の「諦念」、つまり、ナチスが圧倒的な存在感を示していたヴァイマル時代末期において、抵抗はそもそも困難な行為であり、抵抗勢力は無力な「敗者」に過ぎないという見方が存在するためである。しかし、著者はそれを歴史的事実が「見落とされ」てきた結果であるととする。

本書は、一九二九～三三年の時期を中心に、ナチス（著者の意向に添って以下「ナチ」と記す）への「抵抗」をめぐるドイツ共産党（KPD）の動向の振幅に迫ったものである。「ジグザグ・コース」を辿りながらも社会民主党（SPD）との統一戦線を模索するKPDの歴史を軸に、経営の内外で展開される反ファッショ運動にポテンシャルを見出しつつ、「なぜナチを阻止できなかったのか」という問いに対する答えを探る。また本書のもう一つの狙いは、イデオロギー色の強い冷戦時代の研究の中で「歪められた」歴史的事実の修正にある。それを可能にする

のは、一九九〇年のドイツ再統一を期にソ連側から返却されたコミンテルン関係史料であるが、それはまた従来の研究の限界を突破する新事実をも提示させる。

以下にはまず本書の概要を述べたい。本書はほぼ時代順に章立てされており、本来ならば章を追って述べるべきだが、ここでは論点を浮き彫りにするために本書で念頭に置かれるカテゴリーにもとづいて整理してみたい。つまり、KPDの動向と関連する要素として挙げられる「上」（モスクワ、コミンテルン）、「下」（グラスルーツ運動）、「内」（党内事情）、「外」（ミリュウ、党外世論）の四要素に加え、「ローカル」というカテゴリーである。

まず「上」と「外」について、そして「内」として取り上げられる二つの要素のうち一つについて述べたい。一九三二年春のいわゆる「転換」に象徴的であるが、これらはKPDの政策決定に直接影響を及ぼすものであった。

「上」にあたるコミンテルンのKPDに対する影響力は非常に大きかった。たとえば、三一年三月の「ファッショ独裁」規定（第二章）や同年八月の「赤色人民決定」参加の決定（第五章）、後で触れる三二年の政治局員ノイマンらの解任劇（第七章）など、KPDにとって、あるいは「抵抗」運動にとって重要な局面にことごとく干渉し、党議長テールマンら指導部の決断にゆさぶりをかける。コミンテルンもナチへの危機意識はもっており、必ずしも社共統一に反対の立場ではなかったが、コミンテルンが干渉した結果それが遠のくことも多かった。テールマンらは基本的にコミンテルンに忠誠を誓っているが、モスクワとKPDが必ずしも一枚岩の構造ではなかったことも示される（第八章）。

「外」とは、経営外からKPDに影響を及ぼす要素である。SPDな

どの他政党や世論が挙げられようが、KPDとは異なる路線でナチに抗した労働者などもこれに該当する。彼らには、よく知られるクナイペ（居酒屋）の他、クリックと呼ばれる若年労働者の集団などに象徴される共通のミリューが存在した（第一章）。このミリューと、労働者街で実感されるナチへの恐怖こそが、KPDを突き上げ、反ファッショ運動の中核となる自警団の結成へとつながっていく重要な背景として強調される。しかし、彼らをいかに経営に連携させるかという課題はKPDに常につきまとった。この運動の実態が必ずしもKPDの方針と一致しなかったためである。しかし結局KPDは、こうした勢力と接点を保つため妥協を余儀なくされる（第六章）。

「内」における党内対立の問題も重要な要素である。象徴的なのが、主に一九三二―三三年に起こった、党議長テールマンとナンバー2の政治局員ノイマンの対立である。対立は、双方の支持者をまきこんだ組織的な争いに発展したとされる（第七章）。三二年八月の「赤色人民決定」に際してコミンテルンの干渉を誘ったのも、この対立を背景としたものであったという（第五章）。最終的に同年五月にコミンテルンの介入でノイマン側が弾劾、更迭されることで決着がつくと、KPDの指揮系統はテールマン派に一本化される。しかし一時的にであれ同時に二つの系統が存在したことは党の方針を混乱させ、大きなダメージとなった。

以上の要素に対して、著者が「抵抗」のポテンシャルを見出すのは「下」および「ローカル」、そして「内」におけるもう一つの要素である。「下」が指すグラスルーツ運動としては、主に二つが挙げられる。第一に、代表者会議運動である。この運動は、本書において階級同盟の実態的機関としての可能性を大いに示したものであったと評価される。同運動は、三〇年にベルリンで起きたナチ党員によるSPD系の青年殺

害事件を受けて、SPDとKPDそれぞれの労働者が糾弾集会や抗議デモなどで統一行動をとる中で準備された。運動は全ドイツ的な広がりを見せ、三一年春の時点で「ドイツにおける反ファッショ人民戦線」の相を呈していたという（第二章）。KPDは、三〇年一月に構想した「反ファッショ人民革命」の担い手として、同運動に期待をかけたと思われる。しかしファシズム理解などにおいて不整合が存在したり、指導部が「ファッショ独裁」規定を改めたこともあり、翌年には党の路線から排除する。

第二には、「転換」以後の反ファッショ運動が挙げられる。三二年四月にKPDはそれまでの基本軸であった「社会ファシズム」論を離れて新たな方針を発表し、院内共闘へ向けて動き出す。この方針には「反ファッショ行動（アンティファ）」という名称が与えられ、労働者による自警団運動と、超党派的な集会の場である統一会議が主な担い手となった。運動は隆盛し、「もはや前進を止められない」（一二二頁）と言われるほどであったという。しかしこの動きは、KPDが構築していったというよりはむしろ、停滞に悩んだ指導部がもともと存在した「下」あるいは「外」の運動を取り込み、加速させたものであった（第八章）。日々ナチの暴力に曝される労働者の生活の場では、指導部よりも危機感が強かったのである。このように、「現場」が先行し、それに突き上げられる形で指導部が理論的に後追いつくという形が常であった。それは三二年夏になっても変わらない。この段階に及んで「下」の「逸脱」を懸念し、統一ムードを警戒する指導部に「下」の不信感は高まっていたのである（第九章）。

次に「ローカル」であるが、第三章は、中部ドイツの小邦ブラウンシュヴァイクの分析に丸ごと割かれている。ここでは、三一年三月にヴァ

イマル末期においては稀有と言うべき院内共闘が成立したためである。三〇年九月のブルジョア・ナチ連合政権成立以来、この地は「ナチの牙城」であったが、ナチの暴力に対して社共両党の経営外で共同のデモや抗議集会が行われるようになる。さらに選挙ではナチの躍進を阻止することに成功する。こうした状況が地方KPDの理論的態勢に変化を及ぼし、共闘へと至ったのである。本書は、この事件を、先に触れた「反ファシヨ人民革命」構想が単なる机上の空論ではなく実態を伴ったものであった証拠として評価する。一方、この事件を党の基本方針からの「逸脱」と受け止めたKPD指導部は、当初大いに狼狽し地方への牽制へと動く。しかし、三二年秋には、「上」からの統一戦線の動きを牽制するために、一転「下」からの「統一戦線政策が正しく実行された最良の例」（一一八頁）として評価することになった。

一方、対立を抱える「内」にもポテンシャルが見出される。宣伝・運動部の存在である。党指導部とは異なる理論的展開を行った同部は、本書では、「いわば一九三五年のコミンテルンの歴史的転換を先取りしていた」（七九頁）と評価される。部長ヴィンターニッツや副部長エーメルらを中心に、同部は早くからナチの分析に着手し中間層の獲得を主張する。そして、指導部が「反ファシヨ人民革命」構想を廃棄した三一年の春以降も、「人民革命」の理論的展開を模索するのである。しかしテールマンらを中心とした党中央部から批判を受け、ヴィンターニッツ、エーメルの両名は解任、KPDの理論転換の可能性は失われた（第四章）。

以上のように、KPDは多様な要素によって揺さぶられる中でナチへの抵抗を模索した。コミンテルンの意に添うことも、「現場」の期待に応えることも出来ず、態度を二転三転させる指導部、特に党議長テール

マンの指導力不足は明らかである。しかし、「アンティファ」を表明しいったん共闘に積極的になれば、予想以上の成果がもたらされた。三二年三月、四月の大統領選挙では都市部を中心に大敗を喫したが、「転換」後の七月選挙では都市部で挽回し、農村部では前進する。逆にナチの得票は以後減少に転じ、一月選挙では初めて敗北に追い込まれるのである。ナチ政権が成立した翌月の三三年二月に起きた国会炎上事件を契機に、KPDは非合法化に追い込まれる。しかしその後の三月選挙にいたっても、ナチは過半数を獲得できなかった。選挙での躍進に加え、三二年末から三三年にかけて、ザクセン邦を中心とした都市でつぎつぎと院内共闘への動きが起ころ。このような激しい追い上げは、この時期のナチを含む右翼系の雑誌に「共産主義の危険」をしばしば書かせるほどのものであったという。つまり、ナチ政権成立直前、あるいは成立後の段階になっても「抵抗」の動きは止まらなかったのである。この事実を、先に見た「下」の運動や「内」の異論派、「ローカル」といったナチ打倒に向けた数々の芽と併せ見れば、ヴァイマル共和国末期の「抵抗」は、敗北の歴史だけでなく、「失われた可能性とポテンシャルをもった歴史」（二〇六頁）として叙述されると著者は結論する。

以上、本書の概要を見てきたが、本書を手にした読者はあたかもひとつの歴史劇を見たような読後感を持つだろう。それは様々な主体の動向が、緻密な史料分析にもとづき日付単位で綿密に跡付けられたことによるものに他ならない。とくに三一年の「人民決定」参加問題をめぐる動向はドラマティックである。ここでは一度不参加を決めたKPD指導部が、コミンテルンの圧力で方針を変更するという一連の動向が明らかにされる。分析には、モスクワとの電話や手紙のやりとりや、指導部の手書きメモ、書記局会議の議事録などといった内部文書が使用され、刻

一刻と変化するモスクワとKPDの状況を如実に伝える。またこの問題は、旧西独研究者らによってKPDの「社会ファシズム」論を論証する格好の材料とされていた。しかし新たな史料を駆使することによって、決定に至るまでの過程が決して直線的なものではなかったことが示されたのである。「歪められた」歴史は、このように本書の随所において修正される。

また、「上」「下」「内」「外」といった多角的な観点が導入されていることもKPDの歴史を多面的に描き出している。これによって、KPDが決して一つの党として完結していたのではなく、内外に多様な勢力を抱えていたということ、さらにそれぞれの勢力と常に齟齬を抱え、一枚岩には成りえないままであったということが描き出される。そしてこれこそが、ナチを阻止できなかった責任を指導部だけに負わせてきた「従来の研究の限界」（二七八頁）を越えるものとして示されるのである。

以上のように、本書はナチへの「抵抗」を扱った研究としても類のないものであるが、KPD研究としても非常に貴重であると言える。ナチ研究に比べると、KPDに関する研究はことわが国においては十分に深化されているとは言えないためである。労働者の置かれたミリューーに関しても一次史料を駆使した詳細な検討がなされており、ドイツ近現代史を学ぶ者にとって必読の書であると言える。

それでは最後に若干のコメントを加えて結びとしたい。評者はKPD、あるいは反ファシズム運動に精通していないため、以下の点が気になった。まず第一に、KPD指導部がナチ分析をどの程度の水準で行っていたのかということである。先に述べたように、指導部と反ナチ諸運動との間に明らかな温度差があることは著者も指摘されている。ナチ政権成立直前期になつてさえ、ナチを阻止することよりも、KPDの「路

線」や指導権を遵守することに重きが置かれている印象はぬぐえない。宣伝・扇動部についての詳しい言及はあったが、それに批判的だったという指導部のナチ分析について知りたいところである。

第二に、同じく理論面であるが、KPDの基本路線であった「社会ファシズム」論の内容についてまとまった言及が欲しかった。既に触れたようにその後の変遷については詳細に論じられているが、KPDがそもそもどのような革命を描いていて、実態的な活動としてどのようなものが想定されていたのかということに関してもう少しページが割かれていれば、それが三三年一月へ向かって、どのように動揺したのか、あるいは反ファシズム運動の実態とどの程度乖離していたのかということに関して、KPDの「苦悩」がより明確になったと思われる。

なお、近年ではジェンダー研究者としても活躍される著者であるが、あとがきによれば、両研究に共通するのは「解放を目指す」（二五九頁）ことだという。解放を求めて抵抗する人々に対する深いシンパシーは、本書からも確かに読み取られる。今後著者の両研究の成果が結び付けられることもあるかもしれないという期待をせずにはいられない。

（たかさき みずほ・京都大学大学院）